そして始まる英雄譚？

迷い猫

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

http://www.akatsuki-novels.com/

注意事項

このＰＤＦファイルは「暁～小説投稿サイト～」で掲載中の小説を「暁～小説投稿サイト～」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁～小説投稿サイト～」を運営する肥前のポチに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そして始まる英雄譚？

【作者名】
迷い猫

【あらすじ】
無限に等しい膨大な数の本が整然と並ぶ世界。
そこに壁はなく、天井もなく、ただただ白だけが続き、本棚が屹立していた。

《神々の書架》
数多ある世界の始まりから終わりまでを記した書が眠る異界。
とある一柱の神が創り上げた叡智の集積地。
システムに干渉することはできず、それどころか構造そのものす

らをも完全に解析できないそこは、様々な世界にアクセス可能で、《鍵》を持ったものであればどの世界からでもアクセスすることができる。

けれど《鍵》の所有者はそれぞれに閲覧可能な書に制限がかけられ、書架の全容を知ることはできない。

利用できないと知った神々からは見向きもされない、既に忘れ去られた世界に一人、とある少女が誘われる。

黒い髪に黒い瞳をした混じり気のない人間。　魔法の存在も、書架の存在も、神々の存在すらをも知らないまっさらな人間。

数多ある世界の全てを内包した異界に放り込まれた少女は、そこで己の出自を知り、そして……

「いきなり『貴方にはこれからいわゆる異世界にいってもらいます』って言われて『はいわかりましたいってきまーす』って言えるのは大馬鹿か頭のネジが外れてるかだよ！」

「貴方が元いた世界とは使用している言語も文化も法律も情勢も、なにもかもが異なります。　このままなにもしなければ早々に野垂れ死ぬことは明白です。　だから、それなりに困らない程度の力と知識を与えましょう」

「私も貴様と共に向こうにいく。　貴様が向こうでなにを成し、世界をどう書き換えていくのかをこの眼で見ておかねばならんのだ。　だが忘れるなよ人間。　私はあくまで観測者だ。　故に守護も助勢もせん。　死にたくないのなら貴様の力で生き抜いてみせよ」

一人の少女による一風変わった英雄譚、開幕

始まりの気配のない始まり？

気が付けば知らない場所にいる。

物語の導入としてはありふれたもので、異世界転移ものなんて言われるジャンルの小説だったりアニメだったりは大体そんな導入だ。

目を覚ます場所の多くは森とかお城が主流で、ちょっとした変化球なら戦場のど真ん中もあった。　他には街の路地裏とか草原とか、ああそう言えば民家のお風呂で目を覚ますなんてパターンもあったっけ。

ちなみに私はちょっと変化球気味に遺跡。　２００年ほど前に滅びた王国跡地が私の異世界生活の第一歩だった。

そう。　異世界転移ものよろしく、私は元いた世界からここに転送されたのである、まる

「ここ、どこ……？」

「何を呆然と呟いている。　ここはルーゼンローグの遺跡。　まさか自分で希望しておいて忘れたのか？　だとしたらとんだ無能だな」

……同行者のツッコミが厳しい！

「いやー、ちょっとしたお約束ってやつなのさ。　うんうん、覚えてる覚えてる、もちろん覚えてるって」

「だったらわからない風を装うな。　紛らわしい」

「だからお約束なんだって。　異世界転移ものだったら冒頭で必

ず言うセリフって言っても過言じゃ……あ、ごめん微妙に過言かも」
「私には貴様が言っていることがまるでわからん」
「興味があるなら教えたげよっか？」
「興味などあるわけがないだろう」
「だよねー」

バッサリと切って捨てた同行者に苦笑いで返しつつ空を見上げる。
空は綺麗な青色で、不思議とそれだけで少し安心した。
さて、感傷に浸っている余裕はないし、ここから先は生死がかかったサバイバルだ。　まずは現状と装備の確認をしておこう。

ここはルーゼンローグの遺跡。
ルーゼンローグって言うのはこの辺りに昔あった王国の名前だそうで、今は書物に名前だけが残っているそうだ。　遺跡をぐるりと囲む森は外敵から国を守るために作られたもので、魔除けと人除けの呪いが施されていたらしい。　既に国が滅んでいる今はその呪いもなくなっているから問題はないとかなんとか。　それでも半径５ｋｍにも及ぶ円形の森は私みたいにサバイバル慣れしていない一般的な日本人女子中学生からすれば殆ど迷宮と言っていい。

それでもこの場所を転移先に指定した理由は主にふたつ。
ひとつは単純に人目につかないから。
発掘調査も研究もかなり昔にやり尽くされたこの遺跡は、転移なんて言う目立つことをしても誰にも見られる心配がなく、私にとっては未知の存在であり危険極まる魔物たちに遺跡を避ける修正があると知ったからだ。
で、もうひとつの理由は極めて個人的で、ルーゼンローグと言う

国名の語源になったとされる《ルーゼ・ミ・ローグ》がこの国の言葉で《旅人に祝福を》を意味するらしいからで、まあ言ってしまえば験担ぎである。

ちなみに他の候補地は、３０００ｍ級の雪山。　陸地まで１ｋｍもある孤島。　広大な砂漠のど真ん中。　などで、ここが最も危険じゃなさそうと言う消極的な理由もあった。　ここが最も安全そう、じゃないのがなんとも頭の痛い話だ。

狙い通りに周囲に人影はなし。　魔物ももちろんいない。　一応の安全は確保されている、と言っていい気がするけどどうなのだろう？

なにぶん異世界転移は初めて……ではなく２回目の経験なので未だに慣れていない。　過信と油断は禁物だ。

装備は動きやすさを考慮したもので固めてある。　服装に関して言えばこの世界のものを取り寄せてもらった。　ゆったりとしたパンツに細めのシャツと、その上から腰丈のフード付き外套。　色は汚れても良いようにと地味目な色合いのもので、正直に言うと非常にダサい。

一応最低限のサバイバル道具を詰めたバッグを用意されていたけど、魔物に襲われて逃げる際に邪魔になるからと丁重にお断りした。

幸いなことに季節で言えば春に相当するようなので、寝袋なんていらないし、森を抜けるのに１日以上かけるつもりもないので、そこまで大仰な道具はいらないのだ。　当面の生活に困らないだけのお金（この世界での共通通貨であるレミル）を貰ってあるから、森を抜けて近場の人里に行き、そこで宿を借りる算段でいる。

必要最低限の装備を受け取らなかったことに難色は示されたもの

の、そもそもの話をすれば魔物が跋扈する森の中で一晩過ごすことになった時点で私の死は確定だ。　生き残るための前提条件は《魔物に遭遇しない》《森を一晩以内で抜ける》と言ったところだろう。
その条件なら余計な荷物は不要でしかない。

無事に森を抜けられる可能性は限りなくゼロに近い。
よしんば抜けられたとして、その先もこの世界で生きていけるとは思えない。
知識は一通り記憶したところで、私はこの世界の住人ではないのだ。　身寄りもいなければ頼れる人もいない状況で生きていくことはかなり難しいだろう。

「ま、やってやりますよーってね」
「……本当に貴様は気味が悪いな」
「端的に酷い！」

同行者からの罵倒に答えてから私はまた空を見上げて、それから目を閉じた。

始まりが始まる前の回想？

「うふぁるふ……」

よく分からない声を漏らしながら、少女は向かっている机に突っ伏した。　広げていた辞典はその拍子に倒れ、筆記用具が巻き添えで弾かれる。　のろのろとした動作で手を伸ばして回収すると、そのままノートを勢いよく閉じた。

「あーもうっ！　わからなしわからなしわからなしぃ！　なにさこの言語！　中途半端に英語に似てるから余計ややこしいっつーの！」

周囲への迷惑を考慮してか小声で喚き散らすと言う高等技術を披露した少女は、それである程度スッキリしたのか、ひとつ息を吐いてから上体を引き起こした。

１４歳と言う年齢を考慮に入れれば小柄な分類に入るだろう体躯。深い黒の髪は短く切り揃えられていて、ジーンズとパーカーを合わせただけの服装がボーイッシュな外見だ。　髪と同色の瞳は意志の強そうで、けれど顔立ちは少女らしい可愛さと無邪気さを内包している。

少女の名は水瀬　有栖。

少し前までは一応、普通の女子中学生。　現在は神候補と言う立ち位置にいる。

有栖には出生に少しばかり込み入った事情があり、それ故に神と

なる資格を得てしまった。　暮らしていた世界に未練がないと言えば嘘ではあるが、是が非でも帰りたいのかと聞かれればその答えは否でしかない。　だからこそ帰ることなくこの世界――有栖を連れてきた神曰く《神々の書架》に未だ滞在している。

有栖が現在頭を抱えながらも続けているのは、これから向かうことになる言語の習得だ。

神候補には試験のようなものが課され、その成績いかんによって階級が決まるらしい。　それを神は《選定》と言っていたけど、実のところ有栖には神となることへの興味なんてこれっぽっちもない。

神の存在が明確に周知されていない世界出身の有栖にとって、神になるための試験と言われてピンとこないのも無理はないだろう。

神や魔法と言った超常の存在は物語の中だけの存在であり、それは観察者として楽しむものであって体験したいとはどうしても思えないのだ。

とは言え、現実を受け入れないようにしているのともまた違う。

有栖は現状を正しく認識し、現実に起こったことを受け止めている。　だからこその勉強なのだ。

先程も言ったように有栖がいた世界――神の言葉を借りるなら第３世界――は超常の存在が広く認識されていない。　世界を管理する神の存在は宗教家や一部の例外を除けば信じられていないし、魔法の存在もこれまた一部の例外を除いて使える者がいないことになっている。

しかし、有栖がこれから行く世界。　選定のために送られる世界は、超常の存在が一般に普及しているのだ。

有栖に説明した神が《第３２世界》と呼称したそこには神が実在し、魔法が一般的な技術として広く普及されているらしい。
文化も社会形式も言語も違う世界にいきなり飛ばされても野たれ死ぬのがオチであり、ましてや治安は元の世界よりも数段悪いと聞けば命の危機を感じても臆病者と謗られはしないだろう。　実際に過去の選定で何人もの死者が出ているそうだ。

もっとも神だってそこまで非情な精神構造はしていない。
死の危険がある世界に飛ばすに際して、神は候補者に《祝福》を与えると言った。
具体的に言えば、選定の地で困らないだけの知識。　更に現地に住まう者たちを大きく上回る能力をも無償で提供するらしい。　実に大盤振る舞いで豪気なことだが、しかし、有栖はこれを断った。
知識は自分で吸収しなければ身にならない。　能力に関して言えばそんなチート染みた真似はできない、と。
他の候補者からは嘲笑や失笑を頂戴したものの、それは有栖にとって譲れない矜持だった。　故に他の候補者が全員それぞれの世界に送られた後も書架に残り、こうして自力で勉強中なのだ。

命の危機を前にして矜持なんて甘いことをと思わなくもない。
そんなものより命を優先しようと少しでも考えなかったと言えば嘘だ。
無償の善意を警戒したと言うのも確かにある。　いきなり問答無用で連れてきた神を信じられなかったのも確かだ。　けれどそれらは結局のところ理由の一部で、根本的な理由は本当にただの、ちっぽけなプライドだった。

「我ながら損な性格だよねー」
「ああ、全くその通りだね」
「うひゃわ！」

自嘲気味な独白にまさかの返答があって思わず変な声が出る。
それでも図書館（正確には、のような空間、だ）で大声をあげてはいけないと言うマナーが刷り込まれているためか、声自体のボリュームはそこまで大きくはない。

「やれやれ。　ここには君以外いないのだから声を大にしようと問題はないと言うのに」
「いつからそこにいたんですか⁉」

驚かされた抗議をしてみても当の本人はどこ吹く風。　まるで気にした風もなくいつものにやにや笑いで肩を竦めて見せた。
先程まで誰もいなかった背後に突然立ったその男こそ、有栖をここに連れてきた張本人にして元凶。　本人曰く上位神が一角。　頑なに名乗ろうとしないので、有栖は彼を便宜的にシロと呼称している。

白い髪に白い肌。　マントのようなローブも白。　瞳は黒だが、その瞳孔もまた純白で、怪しいほど白が似合うためにそう呼ぶことにした。　シロ自身もそれを気に入ったらしく、新しい偽名として使わせてもらうよ、なんて嘯いていた。
顔の造形自体は非常に整っていて穏やかな物腰なのだが、有栖はシロに苦手意識を抱いている。　ここに連れてこられた、からではない。

それは……

「いつからと言われればそうだね、君が『うふぁるふ』と呻いていた辺りからか」

「うげ、そんなとこから……って言うか、何してたんですか？」

「肩甲骨を観察していたのさ」

「変態ですね」

「ふふふ、君の肩甲骨は素晴らしい。　その造形はまるで至高の芸術品だね」

「褒められてるのに嬉しくないです……」

「許されることなら撫で回し続けたいくらいさ」

「絶対に許可しませんからね！」

「ふむ。　では妥協して鎖骨と言うのはどうだろうか？」

「良いわけあるかぁ‼」

この酷くわざとらしい変態性故だ。

有栖の目にはシロの変態性がそれこそ白々しく映っている。

完全な演技とまで言い切ってしまうのは抵抗があるのも確かだが、わざと変態を装っているようにしか見えないのだ。　自身に好感情を向けられないようにするための手段に見えてしまう。

もっともそう指摘したら即刻即答で否定されたので真偽のほどは定かではない。

演技であるならそれはそれで問題なのは間違いないものの、有栖からしてみれば演技であって欲しい言う希望もある。　主に貞操の危機的な意味合いで。　割と切実に。

閑話休題。

有栖とシロの関係性は有栖の尺度で言えば誘拐の被害者と加害者だろう。　それが漫才じみた掛け合いをしているのには些か違和感があるが、実を言えば有栖に被害者意識はない。

苦手意識を持ってはいても、それは乙女の貞操云々についてだけであって、恨みもなければ悪感情もなく、強いて言うのなら≪セクハラ発言をしてくる親戚のお兄ちゃん≫程度の認識だ。　外見が非常に整った好青年風なのもその一因なのだろう。

「さて、勉強の方はどうだい？」

「ちょっと躓いてます……。　最初の頃にも思いましたけど、このエテノ大陸公用語って中途半端に英語に似てるからややこしくって」

「ふむ。　さすがの君も苦戦中と言うわけだ」

「さすがのって言われるほど頭良くないですよ」

「それは謙遜が過ぎると言うものだよ。　君は間違いなく天才さ。それもとびっきりの、ね。　その頭脳は私に匹敵すると言っても過言では……うん、なくもなかったよ」

「ないんかい」

「私は上位神の中でも最良の頭脳を持っているからね。　君のような人間の小娘には及びもしないさ。　まあ、私が人間だった頃と比べれば君のほうが優れていそうではあるけれど」

「そりゃどーも。　……って、シロさんって元々人間だったんですか？」

「おや、これは失言。　話しを全力で逸らさせてもらおうか」

「露骨過ぎるどころか自分で宣言しちゃうんですか……」

頭痛でもするのか頭を押さえる有栖の前でシロはひょいと肩を竦めてみせる。

胡散臭いことこの上ない男だが、どうにも憎めない仕草だ。この辺りも有栖がある程度心を許している原因だろう。

ジト目に晒されながら淀みない動作で有栖が読んでいた本を手に取ると、どうしてか驚き半分呆れ半分の声音でシロは話題転換に走る。

「まさかとは思うけど、辞書もなしにこれを読んでいたのかい？」

「ふえ？　えっと、そうですよ。　でもちょいちょいわからないところがあって……」

「わからないところがあって当然さ。　これは魔法工学関連の専門書だよ。　そうだね、君にわかりやすいように言えば日本語をマスターしたからと言って医学書を読めないのと同じことで、専門用語が多く使われているこれを読めるのはその道の学徒だけだ。　体感でその程度は理解できているのか教えてもらえるかい？」

「んー、８割くらいはなんとか。　前に読んだやつはもう少し簡単だったからいけると思ったんですけど」

「……君は魔法工学者になるつもりなのかな？」

「まっさか。　ただ、読んでると結構面白かったんで止まらなかっただけですよ」

「日常会話に関してはどの程度の理解度だい？」

「あ、そっちは問題ないです。　新聞を問題なく読めるくらいにはなりましたし、小説とかも読めるようになりました」

今度はシロが頭を押さえる番だった。
神々の書架は特殊な空間であり、疲労と言うものが存在しない。どれだけ書物を読み漁ろうと目が疲れたり頭が疲れることは確かにないのだが、だからと言って人間は元より神にだって集中力の限界と言うものがある。

書架に来てから元の世界の時間単位で行って2週間ほどしか経過していないにも関わらず、有栖は未知の言語をほぼ完全に習得したと言っていい。それは神であるシロの目から見ても異常なほどの吸収力だった。

「……質問、いいかい？」
「どぞどぞ」
「君はここに来てから睡眠をとっているのかな？」
「え、寝てませんよ。だって眠くならないですもん、ここ」
「確かに肉体的疲労の概念がないからね。起きている時間をずっと勉強に？」
「はい。最近は魔法工学関連の書物を読んでいます」
「……ちなみに何を読んだのか覚えているかい？」
「えっとぉ……」

そこから有栖が口にした題名は、その全てが様々な分野の専門書であり、これから向かう世界の住人たちでさえ音を上げかねないような難解なものまでその中にはあった。話しぶりから察するに全てを理解しているわけではないようで、今読んでいるものにしても専門用語で躓いていることからもわかるように、それらの知識レベ

ルも各分野の入門程度でしかない。
だからと言って異常であることは些かも変わらないが……

「天才だと思ってはいたがまさかここまでとはね……。　君の集中力と吸収力には呆れてしまうよ」
「そうですか？」
「疲れないからと言って休みなく勉強を続けるなんて並の精神力じゃない。　君たち人間よりも遥かに優れた頭脳を持つ我々神でさえ、真似はしないだろうね」
「でも全部はわからないんですよ。　実際に見てないから魔法の使い方とかはさすがに読んでるだけじゃわからないですし。　ほら、泳ぎ方を知識として持ってても実際には泳げない、みたいな」
「それでも君であれば水の中に放り込めば知識を即座に実践に移して、そして実際に泳いでしまいそうだね」

シロの言葉は褒めているようで実のところ褒めてはいない。　完全に引いているのだ。
神を引かせる人間とは中々珍しいものだが、当の本人は何で引かれているのかまるでわからないのか首を傾げている。

しかし、これではっきりした。
水瀬　有栖は既に異世界へと向かうに足るだけの知識を有している。　どころか神が無償で与えると言っていた知識のラインを大きく超えてすらいるだろう。

「そろそろ君にはあちらに行ってもらうとしよう。　それだけの知識があれば問題はないだろうからね」

「うへ、遂にですかー」
「嫌かい？」
「嫌って言ったらどうなります？」
「もちろん無視して送り込むだけさ」
「ですよねー」

はあ、と嘆息したかと思えば次の瞬間には椅子から立ち上がって身体を伸ばし始めた。　呆れるほどの切り替えの早さだ。

「えっと、すぐに出発ですか？」
「そうしたいところだけど、その前に準備があるだろう？　転移する場所は既に決まっているとは言え何の装備も持たないのは自殺行為だ」
「あ、その件なんですけど、お金だけあれば後は何もいらないです」
「……正気かい？」
「はい。　だって荷物があったらいざという時に逃げられないですし」
「サバイバル可能な装備だけでも持っていったほうがいいと思うけど、それすらもいらないと？」
「んー、森の中でサバイバルした時点で死亡確定ですから」

有栖の言に難色を示すシロだが、確かに言っていることは一理あると言えなくもない。　魔法の存在しない世界から連れてこられた有栖は魔法を使えない。　先程の水泳の話しそのままで、魔法の理論に関しての知識はあっても実際に使用することはできないだろう。
それを見越して能力を与えると言ったのだが、それも断っている

有栖だ。　魔物に遭遇すれば生き残ることはできまい。

「まあ、君がそう言うのであればいいさ。　決して捨て鉢になっているわけではないのだろう？」

「もちです。　現状で生き残るための最適解を選んでるつもりですよ」

「それはよかった。　君に死なれてしまうと少々困ったことになるからね」

「肩甲骨のためですか？」

「それももちろんあるけど、今回の選定の合格者は君だからだよ」

「どう言うことですか？」

「全てが出来レースなのさ。　選定の体裁を整えてはいるけど、君が神となるのは既に決定事項と言うことだよ。　君が死んでしまったり余程のことでもしない限り、その決定は揺るぎはしない」

「それ、言っていいんですか？」

「言って何が変わるわけでもないからね。　上の決定に従うのは人間であれ神であれ変わらない構図だよ」

やれやれと困った風に笑うシロに同情を抱きながらも微妙な反発を覚える。

出来レースだと言うことに関しては何も言いはしない。　問答無用でここに連れてこられた時点で神と言う存在の身勝手さは既に理解していた。　神が決めたことに人間は従えばいいだけだ、と。

そんな意思が透けて見えるし、別段それは不満を抱くことでもなかった。

神と人間の関係は、言ってしまえば人間とペットの関係に似てい

る。

中にはペットを家族として遇する数奇な人種もいるけど、基本的には人間の意志を動物に押し付けているのだ。　だとするならペットたる有栖になにが言えようか。

だから不満なのはただ一点。

自分を神にするためだけに関係のない他人を巻き込んだこと。

候補者と嘘を吐き、多くの人間を選定に巻き込んだことだけがどうしても引っかかったのだ。

――神様の考えなんて私の知ったことじゃないけどさ。

それでも気に入らないことは事実だった。

そんな有栖の心情を知ってか知らずか、シロは静かに1冊の本を出現させるとそれを手に取って微笑する。

他の候補者たちが飛ばされた様を見ていたので有栖は知っているが、あれが世界そのものらしい。

世界を本と言う形に変換したモノ。

世界の起源と終末に至るまでの全てが記された代物。

「君がこれから向かう世界は《第３２世界》。　魔法と科学が混在し、神と悪魔が実在する魔境さ。　治安に関しては君が元いた世界、第３世界とは比べものにもならないほど劣悪だけど、とは言え君がいく時代は幾分まともだね。　少なくとも表立った戦争はないし、差別や迫害もないことになっている――っと、この辺りの説明

は君には不要か」

言ってシロは本を開く前にふと後ろを見遣った。　そこにいるのは1匹の黒猫。　有栖がここに来てから初めて見る、候補者と神以外の生き物にまず警戒心が先に立った。

そしてその警戒が正しいことを有栖は直後に知ることとなる。

「本命の神候補には観測者が付くのが決まりでね。　この子が君の観測者と言うわけだ」

「この子が？」

「もちろんこの子は観測者であって協力者ではない。　君が命の危機に瀕しようと手助けはしないし助言もしない。　そこを間違えてはいけないよ。　さて、ご挨拶しなさい」

有栖に忠告を与え、最後の言葉は黒猫に向けてだ。

その言葉に従うように黒猫が跳ねて机に着地すると、青と黄の双眸で有栖を射抜いた。　鋭い眼光に思わず怯みそうになりながら、有栖も負けじと視線を投げ返す。　もっとも睨むとは程遠い視線であり、黒猫は恐れをなすことなく口を開く。

「挨拶と言われたが、貴様のような小娘に名乗る名はない。　好きに呼べ」

決して愛らしい類の猫ではなく、どちらかと言えばキツい風貌だが、そこまで攻撃的な口調は予想外だった。　喋ることまでは予想していた辺りが有栖らしいと言えるだろう。

閑話休題。

有栖に向かって攻撃的な口調の黒猫。　驚きながらもまるで気にした風のない有栖。　そんな2人を見て楽しげに笑うシロ。

なんとも混沌極まる状況を動かしたのはやはりと言うべきか有栖だった。

「えっと、あなたが一緒に来てくれる人でいいのかな？　あ、人じゃないか」

「おい主人。　この小娘は何故驚かないのだ？」

「ん、さあ？　でも驚いてもらえないのは仕方ないよ。　なにしろそこの肩甲骨ちゃんはここに連れてきたときも驚かなかったのだからね」

「ちょっと待ってください。　しれっと人のことを不愉快な相性で呼ばないでもらえますか？」

「なるほど。　この肩甲骨は常識の範囲から大きく逸脱しているのか」

「ちょい！」

「そして常識に囚われていないからこそ美しい肩甲骨なのだよ」

「あーもうっ、黒猫さんも新しいボケ要員なんですか⁉　って言うか話しを進めてください！」

もっとも過ぎる主張である。

有栖も大概変わり者だが、それでもシロや黒猫に比べれば随分とまともな部類に入るようだ。

有栖の叫びを聞いてと言うわけではないだろうが、シロは一連の

流れで満足したのか再び居住まいを正して説明役に戻った。

「さて、とりあえずの持ち物は最低限度のお金でいいとして、服はどうするつもりだい？」

「あー、さすがにこれじゃ駄目ですよね……」

「駄目とは言わないけど悪目立ちはするだろうね。一応好きな服を用意できるけど？」

「じゃあ、現地に溶け込むような感じでお願いします。デザイン性とかファッション性は無視してもらって構わないので」

「わかったよ。じゃあ、転移前に着替えを済ませてしまおうか」

「言っておきますけど、覗いたりしたらさすがに怒りますよ？」

「安心するといい。君の肩甲骨と鎖骨は魅力的ではあるけど、それは服越しであったりほんの少し見えたりするからいいのであって、裸にまではそれほどの興味はないよ」

「……それじゃあ着替えますから服を出してください」

「おや、遂にスルーされてしまったか。まあいいさ。案内しよう」

言って踵を返すシロの後ろを追いかけながら有栖は思う。

遂に始まるのか、と。

決して楽しみなわけではない。正直に言えば気が重い。

それでも少しだけホッとしているのは、自身の出生と第３２世界の関係を聞いたからだろう。

――やっと帰れる

第３２世界。

魔法が存在し、危険と未知が待ち構えるそこは、有栖が本来生まれるはずだった世界だった。

――そこに私の居場所があるはずだから

言葉通りの意味で神の悪戯によって生まれるべき世界を間違えた有栖は、ようやく本来の生をそこで取り戻せると考えている。

――もしも居場所がなかったら私は……

シロの背中を追いながら、有栖はきつく拳を握りしめた。

そんな有栖の後ろ姿に黒猫が小さなため息を吐いた。

始まりの直後に終わり？

「そして私は着替えを済ませてここに跳ばしてもらったのである、まる」

「？　誰に向かって話しているのだ？」

「んー、これも一種のお約束ってやつだからねー。　それはさておき……これからどうしよっかな」

「……念のため言っておくが、私は貴様の味方ではない。　あくまでただの観測者であって、協力の意思も権利も義務も持たない無力な猫だ。　故に助言を求められたところでなにも言えぬし、助力を請われても手は出さん」

にべもない同行者――本人の言を借りるのなら観測者――の答えに有栖は苦笑いを浮かべてしまう。　この世界に転送してもらう直前、着替えを終えた有栖に言っていた宣言から僅かたりともブレていないからだ。

それはそういうものなのだろうと適当に納得している有栖だが、呆れてしまうのは無理からぬことだった。

ここはルーゼンローグの遺跡。

第３２世界に跳ばされた有栖と同行者である黒猫はかつての王宮跡にいた。　周囲には柱や壁だったと思われる建造物の名残がいくつかあり、風化して解読が困難になった壁画が保存処理もなく野晒しにされている。

このまま時が流れればいずれ遺跡と呼ばれることもなくなってしまうのだろう。　そう思うと有栖は少しだけ寂しいと感じてしまう。

もっとも、訪れる人が誰もいない程度には既に忘れ去られているし、だからこそここが転送の候補地に上がったわけなのだが。

「んっと、今は何時くらいなのかな？」

「その程度であれば許容範囲だな。　１０時を回って少ししたところだ。　無論、午前だ」

「ありがと。　じゃあ、さっさと森を抜けちゃおっかな。　ここで時間を使ってもいいことなさそうだもんねー」

「そうか」

「れっつごー」

言いつつ棒読みなのは乗り気ではないからか。

普通の人間であれば深い森に踏み入るのは躊躇して然るべきなので当然だろう。　神の祝福を断った有栖だが、その価値観はそこまで歪んではいない。

死ぬのは怖いし、怖いことは嫌なのだ。

けれど、躊躇は一瞬で、有栖はすぐに気負いのない滑らかな所作で一歩を踏み出す。　黒猫も並んで歩き始めた。

「ところで」

と、森に入ってから少しして黒猫が言う。
ザクザクと歩く有栖は無言のまま先を促し、黒猫もそれに応えた。

「淀みなく歩いているが、向かう先に当てはあるのか？」

それは極めて重要な問いだろう。
有栖の歩に躊躇はない。　どこに向かおうか決めているかのように迷いのなく歩き続けている。　まるで見知った森を歩くような自然さで、だ。
しかし、当の有栖は緩く首を振った。

「当てなんてないよ。　でもほら、この森の構造は中心を空洞に半径５ｋｍの綺麗な円形でしょ？　だから、とりあえずの方向を定めておけば最短５ｋｍで森を抜けられるわけだし、その先を考えるのはその時でいいかなって」

「この森の中で方角を見失わずに歩けるものなのか？」

「方位磁石があるからね。　いやー、文明様々だよ」

言いながら有栖は以前からの疑問について思考してしまう。
この世界、第３２世界は有栖がいた第３世界と似通っている点が多すぎるのだ。
１日は２４時間であり、１年は３６５日。　距離や重量に関しての単位も同一。　世界地図を見れば形は違うものの、この天体の大きさは地球と差がないことがわかったし、細かなことを言えば方位磁石のように多くの点で同一だったり相似だったりしているのだ。

『それは今の君が知っていいことではないからね』と言うのがシロの言だったが、それで気にならないようになれるのであれば苦労

はしない。　偶然でと言う方便で片付けられなかったと言うことは、なにかしらの理由があるのだろう。　あるいは作為か。

諸々の法則が元いた世界と大差ないのは有栖にしてみればありがたい話だが、それと気になることとは別の話だった。

幸いにして、そんなことを考えている余裕はすぐになくなるのだが。　いや、この場合、不幸にして、か……

「――――――――‼」

それは天を衝く咆哮。　地を揺らす轟音。

人のものとは根本から異なる、暴力的な音としか表現のしようのないそれが有栖の耳朶を打った。　それがなにを意味するのかくらい、経験の乏しい有栖にも簡単に理解できる。

「やっぱこのまま見つからないかもなんて甘い考えだよね……」

「だろうな。　どうする？」

「逃げるに決まってるでしょ――が！」

言うが早いか、有栖は森の中を駆け出した。　その決断に驚きつつも黒猫はその後を追う。

逃走を選んだと言うことはつまり、彼女はまだ生きることを諦めていないのだ。　今の咆哮が自身を捕捉した魔物のものであり、魔物と対峙すればなす術がないと知りながら、それでも生きることを諦めていない。

咆哮の聞こえた方角とは反対方向に駆け出す辺り、まだ冷静さも残っているようだ。

（この小娘は本当に第3世界の住人なのか？）

スルスルと木々の間を走り抜ける有栖の背を見ながら、そんな疑問が黒猫の脳裏を掠める。

いや、それはずっと感じていた疑問だ。

魔法の存在が広く周知されていない世界の出身者を見て来たのは初めてではない。　その誰もが異常な体験に怯え、身を竦ませた。　現状を受け入れることを拒んだ子供もいた。　恐怖に支配され心を崩壊させた大人もいた。　だと言うのに有栖は、全てをあるがままに受け入れ、そして精神に変調をきたすことなく冷静に前へと踏み出している。

神の祝福を拒んだ理由を矜持だと言ったが、黒猫はそれをそのまま信じてはいない。　プライドだけで死の危険に立ち向かえはしないはずだ。

（こいつは生き残るために神の祝福を拒んだ）

自身で得た知識でなければそれはただの情報であり、自身で得た能力でなければそれを頼ることはできない。

それこそが彼女の生き方なのだろう。

少なくとも黒猫はそう推測している。

それは一体どれだけ孤独な生き方だと言うのか。

そんな生き方を選ぶしかないほど、他者を頼ることができないほ

ど、水瀬　有栖と言う人間は自分以外のなにもかもを信じていないと言うことに他ならない。

「うひゃ来た！」

チラリとも後方を確認しないで有栖が叫ぶ。

それもそうだろう。　確認するまでもない。

なにしろ後方から追いかけてくるソレはその足音を隠すつもりもなく、咆哮を上げながら追って来ているのだから。

彼我の距離はおおよそ２００ｍと言ったところか。

チラリと黒猫が後方を見遣れば、木々の間からその姿が確認できる。

巨体の魔物は林立する木々を避けながら追っているため、そこまでの速力を出せないでいるようだ。　対して逃げる有栖は木々を最小限の動作で躱しながら逃走している。

肉体のスペック的に見れば絶望的な鬼ごっこだが、現状での天秤はまだ水平だ。

（いや……こいつ、まさかそれも計算に入れているのか⁉）

声に出さない驚愕はすぐに証明されることとなる。

木々に阻まれていた有栖の視界の先に光が映る。　それは森の中に点在するほんの少しの空洞を示す光。　そこだけは木々が日光を阻むことなく、明るく開けているのだろう。

それを目視した瞬間、有栖は走る勢いを保ったまま手近な木を掴

み、それを起点にして無理矢理に方向転換した。　ほぼ直角と言える鋭角な方向転換は致命的なロスだが、この場合に限って言えば正解だ。

身体能力で圧倒的な差のあるこの鬼ごっこが成立しているのは、障害物となる木々が密生しているからに他ならない。　木々のない森の抜け目に出ようものなら一瞬すら待たずに追いつかれ、捕食されていたことだろう。

可愛げがないほど冷静で、その判断は気味が悪いほど的確だ。命のかかった状況に慣れている風さえある。

スイスイと木々の間を抜けていく背中に迷いはない。　恐怖に身を竦ませる様子もない。

ただ生きることだけに一直線で、ただ生きることだけに夢中だった。

（だが……）

だが、それでも逃げ切れはしないだろう。

肉体のスペックに絶望的な差があるから、ではない。　いや、もちろんそれもあるにはあるが、その点に関して言えば有栖の機転と知性があればどうとでもできる。　肉体的に劣る分を補えるだけの頭脳が彼女にはあった。

それでも……それでも、だ。

人間の体力は無限ではない。

背中しか見えない黒猫の耳には荒い呼吸音が届いている。　逃げ

るための全力疾走は有栖の体力を凄まじい速度で奪い、すぐそこに死がある状況がその精神を音もなく削る。

魔法による補助があるのなら話は別だが、有栖は魔法が使えない。使うことなく、自身の身体のみで逃走しているのだ。　限界が訪れるのは明白だった。

明白だと言うのに恐慌をきたすわけでもなく冷静に走れているのは何故なのだろうか？

掠めた疑問に答えは見当たらない。　有栖に関する情報は全て頭に入れている黒猫でさえ、その理由がわからなかった。

水瀬　有栖は平凡な人間だった。

ある分野に於いて才能の花を開花させてはいたが、それでも平凡と言って差し支えないだろう。　第３世界の基準で照らせば一般人とは言えないものの、かと言って逸脱していたわけでもなく、そんな曖昧な位置に立ちながら平凡な人間であり続けていた。

命の危機に晒されることなく、死を実感することなく、生に執着する必要もなく生き、そして死んでいくはずだった少女。

それがこの状況下でここまで冷静に行動できるのは違和感を通り越して気味悪くさえ感じられる。

「――――っ」

しかし、限界がやってきた。

必死に生きようと走り続けた有栖の限界。　体力の限界。

音もなく迫っていた死神に、ついに追いつかれた。

走る勢いそのままに転倒した有栖の右腕から嫌な音が鳴る。　服のあちこちが破れ、顔は土と血で汚れた。　どうあれこれでチェックメイトだろう。　黒猫は有栖のそばに立ち、小さく息を吐いた。

「ず、ぁ……」

それでも諦めないのか、折れた右腕を庇いながら、立ち上がる。　未だ諦めの色のない双眸で前だけを見据え、既に消えた生に向かう。

呼吸は最早まともにできていない。　ゼヒュッゼヒュッと壊れた呼吸音が辺りに響き、フラフラと頼りなく揺れる身体に鞭打ち、一歩、また一歩と前に進んでいく。

後方から届く魔物の足音は意識にないのか。　全身を蹂躙しているであろう痛みを知覚していないのか。　決定された絶望に絶望していないのか。

その歩みは、決して止まらない。

だが……

（これで終わり、か）

ズドンと爆音を轟かせ、ゴウッと爆風を撒き散らし、魔物が有栖のいく手に立ちはだかった。

二足歩行の狼のような風貌をした魔物に咆哮はない。　最早逃げられない獲物を狩るのに威嚇する必要もないのだろう。　小さな唸りを上げ、獰猛な牙と爪で有栖を蹂躙せんと獣が動く。

それすらも既に見えていないのだろう。　もしかしたらもう意識はないのかもしれない。
それでも、それでも歩みは止まらなかった。
ただ生きるために。

魔物が一瞬躊躇うように動きを止め、しかしそれも一瞬。　すぐに爪を立てた右腕を振り上げ、そして……

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~18510

そして始まる英雄譚？
2017年03月21日　07時07分発行